

# 家庭環境, 個人特性, 友人関係, 学校環境が 小学生の問題行動に及ぼす影響の検討

大久保 智生・村尾 勇樹\*・山下 悠\*\*

(学校教育) (さぬき市立さぬき南小学校) (高松市立十河小学校)

川田 剛\*\*\*・中川 大暉\*\*\*\*・石井 寿代\*\*\*\*\*

(丸亀市立城西小学校) (さぬき市立志度小学校) (井原市立荏原小学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

\*761-0905 さぬき市大川町南川61 さぬき市立さぬき南小学校

\*\*761-0433 高松市十川西町366番地5 高松市立十河小学校

\*\*\*763-0026 丸亀市六番丁12 丸亀市立城西小学校

\*\*\*\*761-2101 さぬき市志度727 さぬき市立志度小学校

\*\*\*\*\*715-0003 井原市東江原町2584 井原市立荏原小学校

## Effects of Family Environment, Personal Characteristics, Friendship, and School Environment on Problem Behavior of Elementary School Students

Tomoo Okubo, Yuki Murao\*, Hisashi Yamashita\*\*,

Tsuyoshi Kawata\*\*\*, Hiroki Nakagawa\*\*\*\* and Hisayo Ishii\*\*\*\*\*

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

*\*Sanuk iminami Elementary School, 61 Minamikawa, okawa-cho, Sanuki 761-0905*

*\*\*Sogo Elementary School, 366-5 Sogawanishimachi, Takamatsu 761-0433*

*\*\*\*Josei Elementary School, 12 Rokubancho, Marugame 763-0026*

*\*\*\*\*Shido Elementary School, 727 Shido, Sanuki 761-2101*

*\*\*\*\*\*Ebara Elementary School, 2584 Higashiebara-cho, Ibara 715-0003*

**要旨** 本研究の目的は、家庭環境、個人特性、友人関係、学校環境が小学生の問題行動に及ぼす影響について検討することであった。小学4～6年生297名(男子153名、女子144名)に対して質問紙調査を実施した。分析の結果、性別によって、各要因の影響の仕方が異なることが明らかとなった。また、問題行動の要因の特徴別に分類したところ、要因の組み合わせのパターンごとに、問題行動に違いがあることが明らかとなった。

**キーワード** 小学生の問題行動 家庭環境 個人特性 友人関係 学校環境

### 問題と目的

文部科学省(2018)によると、2006年から2016年の10年間で、中学生の暴力の発生件数は減少傾向にあるが、小学生の暴力の発生件数は

増加傾向にあることが示されている。問題行動に関する研究はこれまで、中学生を対象とした研究が数多くなされてきたが、小学生の問題行動については研究が多いとはいえないため、本

研究では、近年、増加傾向にある小学生の問題行動の規定要因について明らかにしていく。

これまで、問題行動に関する研究は数多く行われており、様々な要因が指摘されてきた。問題行動の要因については、内閣府（2001）が実施した「少年非行問題等に関する世論調査」によると、非行の要因として第1位に家庭環境、第2位に本人自身の性格や資質、第3位に友人環境、第4位に学校生活が挙げられている。しかし、この調査の問題点として、個人の主観的な意見を集計したものであり、回答者が13歳以上であるため、小学生の意見が入っていないことが挙げられる。したがって、本研究ではこれらの要因が小学生の問題行動に及ぼす影響について検討を行う。

家庭環境と問題行動の関連についての研究では、親子関係の悪さが問題行動を起こす要因となっていることが明らかにされてきた（大西，2016）。中学生における親子関係が非行に及ぼす影響は1年生で大きく、2年生、3年生で小さくなることから、年齢の低いほど非行傾向行為に与える親子関係の影響が大きいことが示唆されている（小保方・無藤，2005）。このことから、小学生の問題行動には、中学生よりも親子関係が影響していることが推測される。

個人特性と問題行動の関連についての研究では、問題行動や非行に関連する個人要因の1つとして攻撃性が取り上げられてきた（Loeber & Hay, 1997）。最近の研究では、攻撃性は細分化され、反動的攻撃性と道具的攻撃性の観点から、反動的攻撃として、叩く、叫ぶ、悪口を言うなどの「表出性攻撃」、敵意、悪意などの「不表出性攻撃」、道具的攻撃として自分の目的を達成するために他人の人間関係を操作する「関係性攻撃」の3つの攻撃性に分けられ、検討されている。これらの攻撃性のうち、表出性攻撃の高さが学校からのドロップアウトや問題行動に影響することが明らかになっている（Khartri, Kupersmidt, & Patterson, 2000; Parker & Asher, 1987）。このことから、小学生の問題行動には攻撃性が影響していることが推測される。

友人環境（友人関係）と問題行動との関連についての研究では、仲間関係が良好なほど凝集性も高いことから、友人が問題行動を起こした際に、その友人とともに問題行動を起こす可能性が示唆されてきた（高木・山本・速水，2006）。また、本研究の対象である小学4年～6年生はギャングエイジにあたり、同調性が高い年齢である。このことから、小学生の問題行動には友人への同調が影響していることが推測される。

学校生活（学校環境）と問題行動との関連についての研究では、学校環境への適応感が問題行動と関連することが指摘されてきた（大久保，2010）。荒れている中学校の反社会的行動と学校環境への適応感は関連していた（大久保・青柳，2003）が、一般的な学校では学校環境への適応感の高さは問題行動の少なさと関連する。このことから、一般的な学校における小学生の問題行動には学校環境への適応感の低さが影響していることが推測される。

こうした小学生の問題行動に及ぼす要因については、それぞれの研究で検討されてきているが、同時に検討されることが少なかったといえる。また、これまでの研究から、問題行動には様々なタイプがあることが示唆されてきている（大久保・加藤，2008）。したがって、問題行動への理解や対応などを考えると、どの要因がどの問題行動に最も影響しているのかについて検討を行い、問題行動の要因の特徴別に分類し、要因の組み合わせのパターンごとに検討を行う必要があるといえる。

以上を踏まえ、本研究では、小学生を対象に、問題行動の規定要因としての家庭環境、個人特性、友人関係、学校環境が問題行動に及ぼす影響について検討する。また、問題行動の要因の特徴別に分類し、要因の組み合わせのパターンごとに、問題行動に違いがあるかについて検討する。

## 方法

### 調査協力者

2019年1月に香川県、岡山県の公立小学校5

校4～6年生10学級297名（男子153名，女子144名）を対象に質問紙調査を実施した。

#### 調査内容

調査内容としては，①フェイスシート，②問題行動の経験，③親子関係，④攻撃性，⑤友人への同調，⑥学級適応感について尋ねた。

①フェイスシート：性別，学年の回答を求めた。

②問題行動の経験：加藤・大久保（2008）の問題行動の経験尺度を使用した。「対人的問題行動」（「先生に反抗することがある」，「友だちをたたいたり，けったりすることがある」，「先生の言うことや注意を無視することがある」，「友だちをいじめたり，仲間はずれにすることがある」，「友だちの発言をバカにすることがある」，「授業中に関係のないことをしていることがある」），「非対人的問題行動」（「授業中に勝手に教室の中を歩き回ることがある」，「学校のをわざとこわすことがある」，「授業に出ないで他のことをしていることがある」，「授業中に教室から勝手に出ていくことがある」）の2因子10項目を尋ねた。回答形式は，「まったくやらない（1点）」から「よくやる（5点）」の5件法である。

③親子関係：小保方・無藤（2007）の父親・母親・友達との関係測定尺度を使用した。調査協力者の負担を考慮して，父親，母親の双方の因子において負荷量の高い，「あなたに元気がないとすぐ気づいて，はげましてくれる」，「あなたが何かなやんでいると知ったら，どうしたらよいか教えてくれる」，「あなたがだれかにいやなことを言われた時に，なぐさめてくれる」の3項目を尋ねた。回答形式は，「まったくない（1点）」から「よくある（4点）」の4件法である。

④攻撃性：坂井・山崎（2004）の小学生用P-R攻撃性質問紙を使用した。調査協力者の負担を考慮して，負荷量の高い3項目ずつを抽出し，「表出性攻撃」（「クラスにはわたしのことをきらっている人がたくさんいると思う」，「わたしの悪口を言う人が多いと思う」，「友だちにばかにされているかもしれないと思う」），「不

表出性攻撃」（「人に乱暴なことをしたことがある」，「からかわれたり，たたいたり，けったりするかもしれない」，「たたかれたら，たたき返す」），「関係性攻撃」（「だれかを仲間はずれにしたことがある」，「放課後みんなで遊ぶ相談をするときに，だれかを入れなかったことがある」，「その子がみんなからきらわれるようなうわさ話をしたことがある」）の3因子9項目を使用した。回答形式は，「まったくあてはまらない（1点）」から「とてもよくあてはまる（4点）」の4件法である。

⑤友人への同調：石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口（2009）の友人への同調性尺度を使用した。調査協力者の負担を考慮して，松下・今城（2016）の主成分分析結果から負荷量が高い，「仲間はずれにされたくないのて，話を合わせる」，「友人と同じことをしていないと不安だ」，「友人と話が合わないて不安だ」の3項目を使用した。回答形式は「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（4点）」の4件法である。

⑥学級適応感：江村・大久保（2012）の小学生用学級適応感尺度を使用した。調査協力者の負担を考慮して，負荷量の高い3項目ずつを抽出し，「居心地の良さの感覚」（「このクラスにいると落ち着く」，「このクラスにいると安心する」，「このクラスにいると気持ちが楽になる」），「充実感」（「このクラスでは先生や友だちから頼られている」，「このクラスでは先生や友だちから認められている」，「このクラスでは先生や友だちの役に立っていると思う」），「被信頼・受容感」（「このクラスにいると何かができてうれしいと思うことがある」，「このクラスでは自分の目標に向かって頑張ることができる」，「このクラスには夢中になれることがある」）の3因子9項目を使用した。回答形式は，「まったくあてはまらない（1点）」から「とてもよくあてはまる（4点）」の4件法である。

## 結果

### 問題行動の経験の性別と学年による差の検討

#### 問題行動の経験の性別と学年による差につい

Table 1 性別と学年ごとの問題行動の経験尺度の平均値と2要因分散分析結果

	男子 (n=150)			女子 (n=144)			2 要因分散分析		
	4 年生 (n=22)	5 年生 (n=59)	6 年生 (n=69)	4 年生 (n=36)	5 年生 (n=52)	6 年生 (n=56)	性別 F値	学年 F値	交互作用 F値
対人的 問題行動	8.500 (4.009)	9.220 (3.409)	8.817 (4.142)	6.667 (1.414)	8.231 (3.197)	8.964 (3.842)	4.045* 男>女	2.747† 6年>4年	1.698
非対人的 問題行動	4.364 (1.706)	4.678 (1.319)	4.522 (1.400)	4.389 (1.479)	4.577 (1.319)	4.321 (.897)	.962	.307	.142

( ) 内は標準偏差

† $p<.1$ , \* $p<.05$ 

て検討するため、問題行動の経験を従属変数、性別（男子、女子）と学年（4年生、5年生、6年生）を独立変数とした2要因分散分析を行った（Table 1）。その結果、「対人的問題行動」では、性別の主効果（ $F(1, 288) = 4.045$ ,  $p<.05$ ）がみられ、男子が女子よりも有意に高かった。また、「対人的問題行動」では、学年の主効果（ $F(2, 288) = 2.747$ ,  $p<.1$ ）がみられ、6年生が4年生よりも有意に高い傾向がみられた。したがって、対人問題行動は男子が女子よりも経験しており、6年生が4年生よりも経験していることが明らかとなった。

親子関係、攻撃性、友人への同調、学級適応感が問題行動の経験に及ぼす影響の検討

親子関係、攻撃性、友人への同調、学級適応感が問題行動の経験に及ぼす影響について検討するため、問題行動の経験を従属変数、親子関係、攻撃性、友人への同調、学級適応感を独立変数として、重回帰分析を男女別に行った（Table 2, 3）。その結果、男子では、「対人的問題行動」に対して、「関係性攻撃」（ $\beta = .383$ ,  $p<.001$ ）、「友人への同調」（ $\beta = .157$ ,  $p<.05$ ）から正の影響がみられた。「非対人的問題行動」に対して、「関係性攻撃」（ $\beta = .334$ ,  $p<.01$ ）から正の影響がみられ、「被信頼・受容感」（ $\beta = -.173$ ,  $p<.1$ ）、「充実感」（ $\beta = -.214$ ,  $p<.1$ ）から負の影響がみられた。女子では、「対人的問題行動」に対して、「親子関係」（ $\beta = -.187$ ,  $p<.05$ ）から負の影響がみられ、「表出性攻撃」（ $\beta = .535$ ,  $p<.001$ ）、「関係性攻撃」（ $\beta = .158$ ,  $p<.05$ ）から正の影響がみられた。「非対人的問題行動」に対して、「友人への同調」（ $\beta$

$= .174$ ,  $p<.1$ ）から負の影響がみられた。したがって、性別によって、各要因の問題行動への影響の仕方が異なることが明らかとなった。

問題行動の要因の特徴による調査協力者の分類

問題行動の要因の特徴により調査協力者を分類するため、親子関係、攻撃性、友人への同調、学級適応感の標準化得点に基づいて、ウォード法によるクラスター分析を行った（Figure 1）。その結果、4群に分類することが妥当であると判断した。クラスター1は全ての得点の値が中間に位置することから「中間群」とした。クラスター2は、友人への同調が高いことから「友人への同調高群」とした。クラスター3は、親子関係、学級適応感が高く、学校、家庭において関係性が良好であると考えられることから「関係性良好群」とした。クラスター4は、攻撃性が高く、親子関係、学級適応感が低く、学校、家庭において関係性が良好でないと考えられることから「関係性不良群」とした。各群の度数は、「中間群」が134名、45.6%であった。「友人への同調高群」が39名、13.2%であった。「関係性良好群」が62名、21.1%であった。「関係性不良群」が59名、20.1%であった。

問題行動の経験の各群による差の検討

各群の問題行動の経験の差について検討するため、問題行動の経験を従属変数とし、各クラスターを独立変数とした1要因の分散分析を行った（Table 4）。その結果、「対人的問題行動」、「非対人的問題行動」において有意差が認められたため、Tukey法による多重比較を行った。その結果、「対人的問題行動」（ $F(3,$

Table 2 親子関係, 攻撃性, 友人への同調, 学級適応感が男子の問題行動に与える影響

	対人的問題行動	非対人的問題行動
親子関係	-.056	.008
表出性攻撃	.017	-.033
不表出性攻撃	.071	-.006
関係性攻撃	.383***	.334**
友人への同調	.157*	.035
居心地の良さの感覚	-.120	.105
被信頼・受容感 (充実感)	-.146	-.173 <sup>†</sup>
	.111	-.214 <sup>†</sup>
重相関係数	.557***	.441***

<sup>†</sup>  $p < .1$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

Table 3 親子関係, 攻撃性, 友人への同調, 学級適応感が女子の問題行動に与える影響

	対人的問題行動	非対人的問題行動
親子関係	-.187*	-.083
表出性攻撃	.535***	.100
不表出性攻撃	.073	.075
関係性攻撃	.158*	.141
友人への同調	-.024	.174 <sup>†</sup>
居心地の良さの感覚	-.050	-.165
被信頼・受容感	-.070	-.031
充実感	.143	.115
重相関係数	.690***	.412**

<sup>†</sup>  $p < .1$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

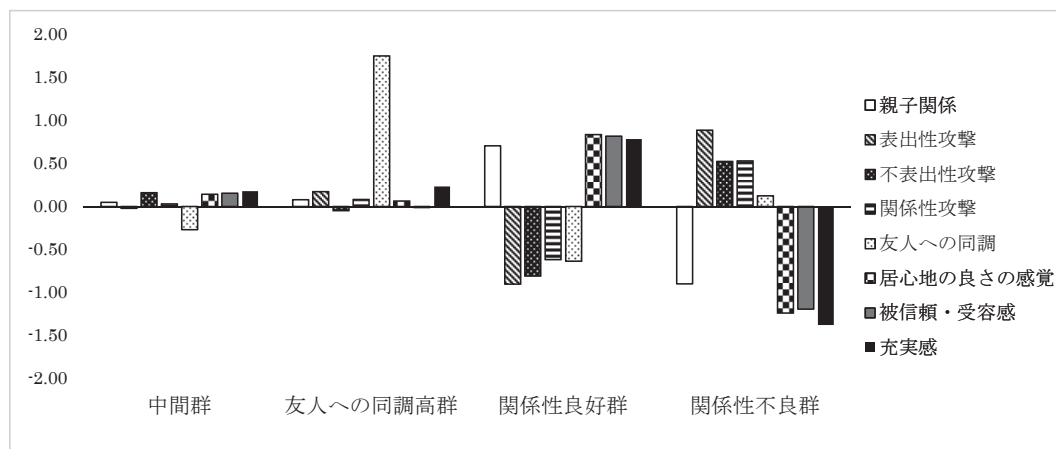


Figure 1 親子関係, 攻撃性, 友人への同調, 学級適応感の標準化得点

Table 4 各群の問題行動の経験尺度の平均値と分散分析結果

	中間群 (n=134)	友人への 同調群 (n=39)	関係性 良好群 (n=62)	関係性 不良群 (n=59)	F値	多重比較
対人的 問題行動	8.657 (3.179)	8.615 (3.329)	6.403 (1.108)	10.441 (4.942)	14.789***	関不>中, 友>関良
非対人的 問題行動	4.343 (1.041)	4.590 (1.272)	4.097 (.469)	5.203 (2.066)	8.882***	関不>中, 関良

( )内は標準偏差

\*\*\* $p<.001$ 

290) = 14.789,  $p<.001$ ) については, 「関係性不良群」が「中間群」と「友人への同調高群」と「関係性良好群」よりも有意に高く, 「中間群」と「友人への同調高群」が「関係性良好群」よりも有意に高かった。「非対人的問題行動」( $F(3,290) = 8.882, p<.001$ ) については, 「関係性不良群」が「中間群」と「関係性良好群」よりも有意に高かった。したがって, 「関係性不良群」が最も問題行動を経験しており, 「関係性良好群」が最も問題行動を経験していないことが明らかとなった。

### 考察

本研究では, 小学生を対象に, 問題行動の規定要因としての親子関係, 攻撃性, 友人への同調, 学級適応感が問題行動の経験に及ぼす影響について検討した。さらに, 問題行動の要因の特徴別に分類し, 要因の組み合わせパターンごとに, 問題行動に違いがあるかについて検討した。

#### 問題行動の経験の性差と学年差について

問題行動の経験の性別と学年による差について検討した結果, 問題行動の経験のうち, 「対人的問題行動」は男子が女子よりも経験しており, 6年生が4年生よりも経験していることが明らかとなった。問題行動の性差に着目した研究では, 男子は教師への不満をそのまま教師への反抗という形で示しても, 周囲から容認, 時には支持されるが, 女子は学校への不満をそのまま表すことを抑制することが示唆されている(加藤・大久保・太田, 2014)。このことから, 男子は女子よりも問題行動に対する抑制が

弱く, 問題行動を起こしていることが考えられる。また, これまでの研究から, 問題行動を経験している割合は男子が多い(小保方・無藤, 2005)ことから, 納得のいく結果といえる。学年差については, 文部科学省(2018)の調査によると, 4年生が6年生より多く問題行動を起こしていることから, 本研究とは異なる結果であった。ただし, 対象校の特性やコホートなどの問題もあり, 本研究の結果から6年生のほうが問題行動を経験しているとは一概にいえない。したがって, 今後, 詳細に学年差については検討していく必要があるといえる。

#### 男女別の問題行動の規定要因について

男女別に親子関係, 攻撃性, 友人への同調, 学級適応感が問題行動の経験に及ぼす影響について検討した結果, 男子では, 「関係性攻撃」と「友人への同調」が「対人的問題行動」に影響し, 「関係性攻撃」と「被信頼・受容感」, 「充実感」が「非対人的問題行動」に影響していることが明らかとなった。男子では, 「対人的問題行動」と「非対人的問題行動」とともに「関係性攻撃」が影響していたが, 「関係性攻撃」は, 女子に特徴的とされる攻撃性ととらえられてきたといえる。しかし, 本研究では男子で「関係性攻撃」が2つの問題行動に影響しており, 女子特有の攻撃性でない可能性も示唆された。男子では, 「対人的問題行動」には「友人への同調」が影響していたが, 本研究の対象である小学校4~6年生は, 同行動による一体感が重視されるギャングエイジであることから, 友人に同調することによって「対人的問題行動」を起こしていると考えられる。男子では, 「非対人的

問題行動」には「被信頼・受容感」が影響していたが、問題行動を起こす要因として不信感が関係していることが明らかにされている(安藤・朝倉・中山, 2004) ことから、先行研究と一致した納得のいく結果といえる。また、男子では、「非対人的問題行動」には「充実感」が影響していたが、日常生活や学習に対して充実感や、やる気を感じることがなくなると、授業中関係ないことをするなどの「非対人的問題行動」を起こしやすくなると考えられる。

女子では、「親子関係」と「表出性攻撃」、「関係性攻撃」が「対人的問題行動」に影響し、「友人への同調」が「非対人的問題行動」に影響していることが明らかとなった。女子では、「対人的問題行動」には「親子関係」が影響していたが、小保方・無藤(2006)は、女子の問題行動をする生徒のほうが男子の問題行動をする生徒より親子関係が親密でないことを明らかにしていることから、先行研究と一致した納得のいく結果といえる。女子では「対人的問題行動」には「表出性攻撃」が影響していたが、従来、「表出性攻撃」は男子が高いものと考えられてきたといえる。しかし、本研究では、「表出性攻撃」は女子においてのみ問題行動に影響していたことから、今後詳細に検討していく必要があるといえる。また、女子では「対人的問題行動」には「関係性攻撃」が影響していたが、「関係性攻撃」は女子に特徴的とされる攻撃性ととらえられてきたため、従来の指摘通りの結果といえる。さらに、女子では、「非対人的問題行動」には「友人への同調」が影響していたが、女子は男子に比べて、学校の不満などを表すのを抑制する(加藤・大久保・太田, 2014) ことから、女子の友人への同調は「対人的問題行動」よりも「非対人的問題行動」を起こしている可能性が考えられる。

#### 問題行動の要因の特徴別の問題行動について

問題行動の要因の特徴別の問題行動の経験について検討をした結果、「対人的問題行動」と「非対人的問題行動」のどちらも「関係性不良群」が最も高く、次いで「友人への同調高群」と「中間群」、そして「関係性良好群」の順となるこ

とが明らかとなった。「関係性不良群」が問題行動を最も多く経験しており、「関係性良好群」が問題行動を最も少なく経験していることについては、ごく自然な結果といえる。つまり、親子関係の良さ、学級適応感の高さ、攻撃性の低さがそろっているという人間関係の良好さが問題行動を抑制するといえる。「中間群」は、全ての要因において高くも低くもないことがいえることから、これらの要因以外の何らかの要因が問題行動に関連している可能性が考えられる。「友人への同調高群」は、友人への同調のみが高い群であり、「関係性良好群」よりも問題行動を経験しているが、この群は問題行動をしている友人と共に問題行動を行っていることが考えられる。つまり、問題行動を起こす友人と一緒に過ごすなどの友人関係は問題行動を促進する要因であることが考えられる。

#### 実践への示唆と今後の課題

本研究の結果から、必ずしも小学生の問題行動を起こす要因は1つではない可能性が示唆され、問題行動の要因の組み合わせパターンも考慮する必要があることが示唆された。教師は、児童の問題行動の要因を、自分の教え方よりも児童の能力や性格などの要因に対して原因帰属を行うことが明らかとなっている(Medway, 1979)。したがって、教師は、個人特性などの一つの要因だけに目を向けるのではなく、児童の友人関係や学校環境での児童の過ごし方などの複数の要因に着目する必要があるといえる。つまり、問題行動を起こす児童の中でも、友人への同調が高いことで問題行動を起こしている児童もいれば、親や友人との人間関係の悪さから問題行動を起こしている児童もいることから、その児童特有の要因に対して支援を行うことで、問題行動を減少させることができるといえる。

今後の課題として、2点挙げられる。1点目は学校の特徴を考慮する必要性である。大久保・青柳(2003)の問題行動の調査のように、荒れている学校では学校環境の要因が逆に影響することもありえる。したがって、荒れている学校での問題行動への影響の仕方などについて

も検討する必要があるといえる。2点目は低学年の問題行動も考慮する必要性である。本研究では、小学4～6年生を対象としたが、低学年の問題行動の要因についても検討する必要があるといえる。その場合は、特に、貧困などの要因なども踏まえて、検討していく必要があるといえる。

#### 参考文献

- 安藤美華代・朝倉隆司・中山薫 (2004). 高校生の問題行動と対人関係における信頼感の関連 学校保健研究, 46, 44-58.
- 江村早紀・大久保智生 (2012). 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連: 小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究, 23, 241-251.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究20, 125-133.
- 加藤弘通・大久保智生 (2008). 小学生高学年における問題行動の実態と規定要因: 学校・学級場面の問題行動に注目して 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇, 59, 153-163.
- 加藤弘通・大久保智生・太田正義 (2014). 問題行動における〈性差〉をどう解釈するか: 生徒指導の作用構造の転換 心理科学, 35, 1-7.
- Khartri, P., Kupersmidt, J.B., & Patterson, C. (2000). Aggression and peer victimization as predictors of self reported behavioral and emotional adjustment. *Aggressive Behavior*, 26, 345-358.
- Loeber, R. & Hay, D. (1997). Key issues in the development of aggression and violence from childhood to early adulthood. *Annual Review of Psychology*, 48, 371-410.
- 松下理央・今城周造 (2016). 小学校高学年における友人関係が学級適応感及び中学校生活予期不安に与える影響 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 18, 55-69.
- Medway, F. J. (1979). Causal attributions for school related problems: Teacher perceptions and teacher feedback. *Journal of Educational Psychology*, 71, 809-818.
- 文部科学省 (2018). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査
- 内閣府 (2001). 少年非行問題等に関する世論調査
- 小保方晶子・無藤隆 (2005). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16, 286-299.
- 小保方晶子・無藤隆 (2006). 中学生の非行傾向行為の先行要因: 1学期と2学期の縦断調査から心理学研究, 77, 424-432.
- 小保方晶子・無藤隆 (2007). 出会い系サイトなどを利用している中学生の特徴: 従来からみられる非行傾向行為との比較 犯罪心理学研究, 45, 61-73.
- 大西良 (2016). 不適切な養育環境を背景とする長期欠席 (不登校) 児の家庭内における情緒的関係に関する一考察: ファミリー・マップを用いた事例分析より 長崎国際大学論叢, 16, 103-112.
- 大久保智生 (2010). 青年の学校適応に関する研究: 関係論的アプローチによる検討 ナカニシヤ出版
- 大久保智生・青柳肇 (2003). 中学生の問題行動と学校および家庭環境への適応感との関連: 個人一環境の適合性の視点から 日本福祉教育専門学校研究紀要, 11, 11-19.
- 大久保智生・加藤弘通 (2008). 問題行動の経験と規範意識による生徒の類型化とその特徴 心理科学, 29, 96-103.
- Parker, J.G., & Asher, S.R. (1987). Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生用P-R攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, 75, 254-261.
- 高木邦子・山本将士・速水敏彦 (2006). 高校生の問題行動の規定因の検討: 有能感, 教師・親・友人関係との関連に着目して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 53, 107-120.